海の道むなかた館　平成30年度
館長講座「日本古代史の諸問題」第5回

平成30年8月12日(日)

海の道むなかた館長　西谷　正

ガラスの来た道

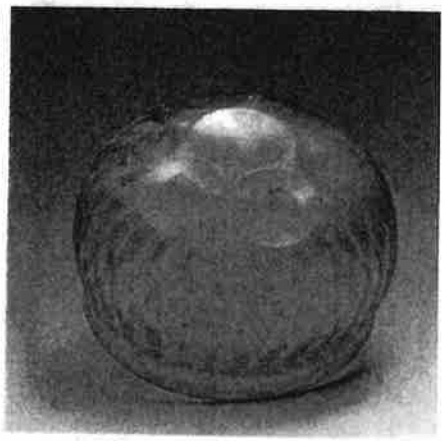
Ⅰ　はじめに

Ⅱ　ガラスの起源と伝播

（1）メソポタミア・エジプト
（2）ローマン・グラス
（3）ササン・グラス
（4）イスラム・グラス

Ⅲ　中国・朝鮮・日本のグラス

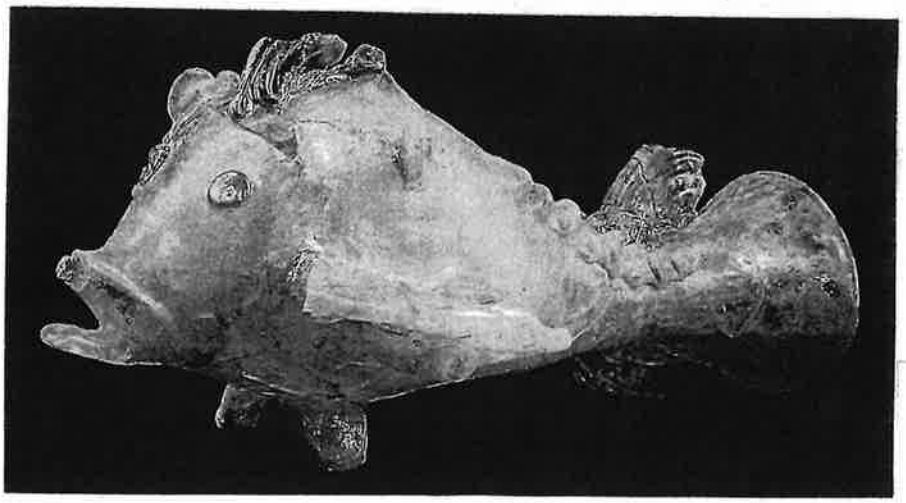
（1）北燕・馮素弗墓
（2）新羅・金城（慶州）金鈴塚・天馬塚・松林寺五重塼塔
（3）唐・長安（西安）何家村・法門寺
（4）奈良・新沢千塚126号墳・東大寺正倉院（中倉）



Ⅳ　宗像・沖ノ島と固原・李賢墓出土のササン・グラス

（1）宗像・沖ノ島8号岩陰遺跡
（2）寧夏回族自治区固原県・李賢墓
（3）大宰府鴻臚館跡

Ⅴ　おわりに



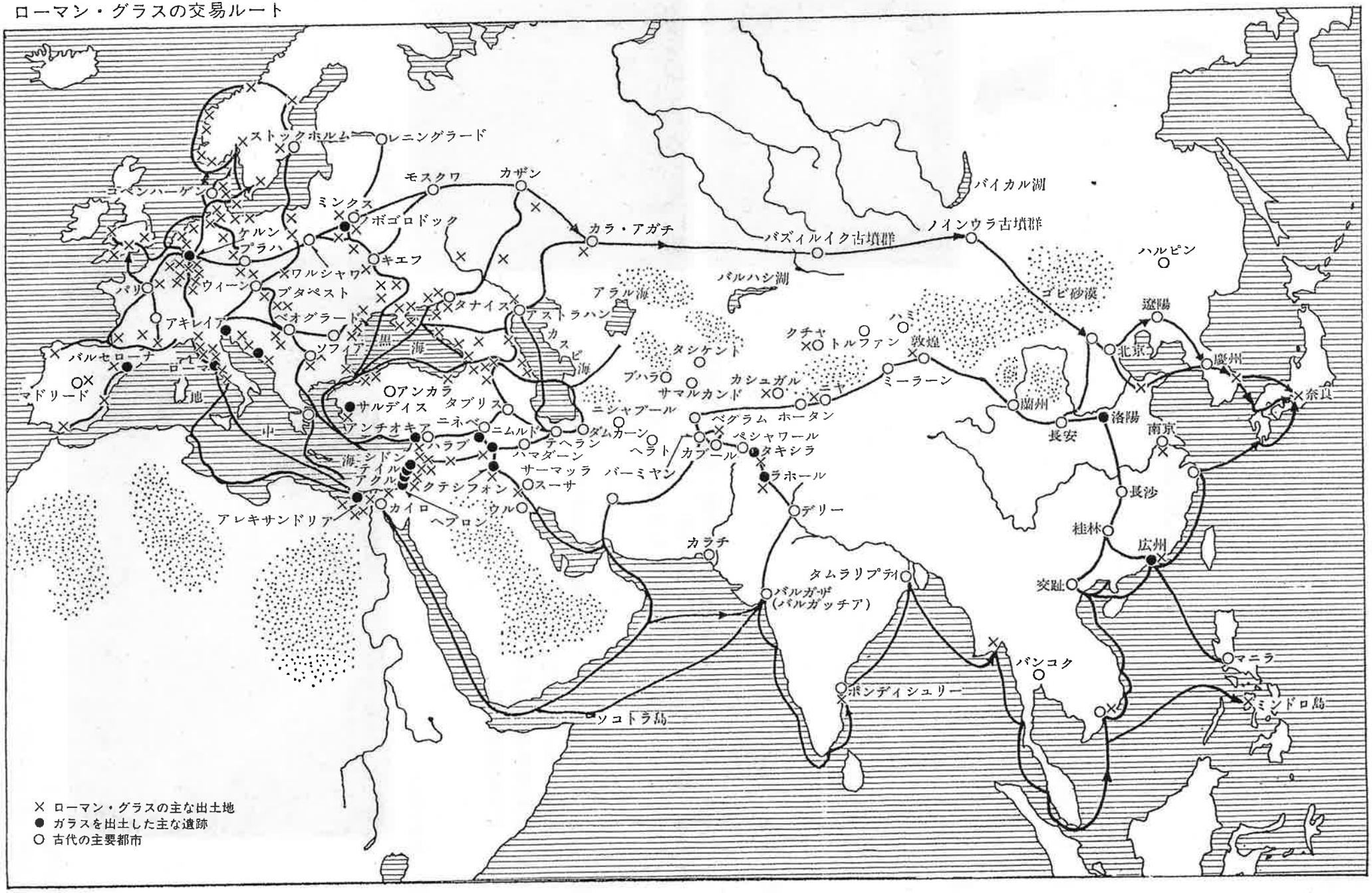
切子括碗（かつ）　ガラス
玻璃碗

北魏時代
口径 10.4 cm　腹径 11.3 cm　高さ 7.3 cm
山西省大同市　1988年出土
山西省考古研究所蔵

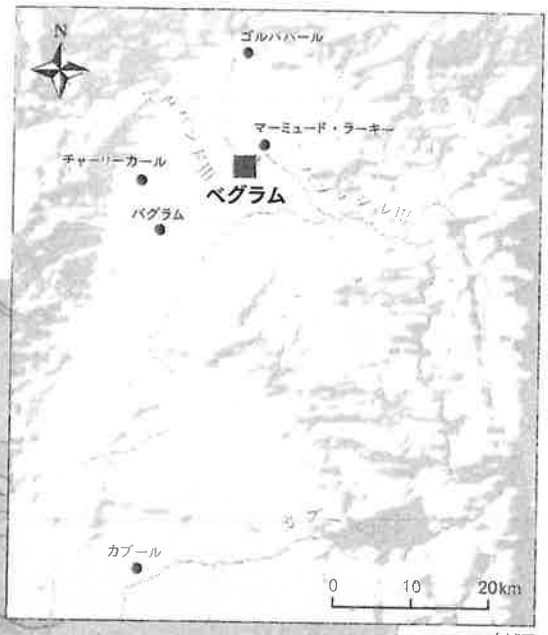
魚形（さかながた）フラスコ
1世紀
ガラス
8.7 × 10.7 × 20.0 cm

【お知らせ】
次回の館長講座は9月9日(日)13：30～(2時間程度) 講義室にて開催いたします。

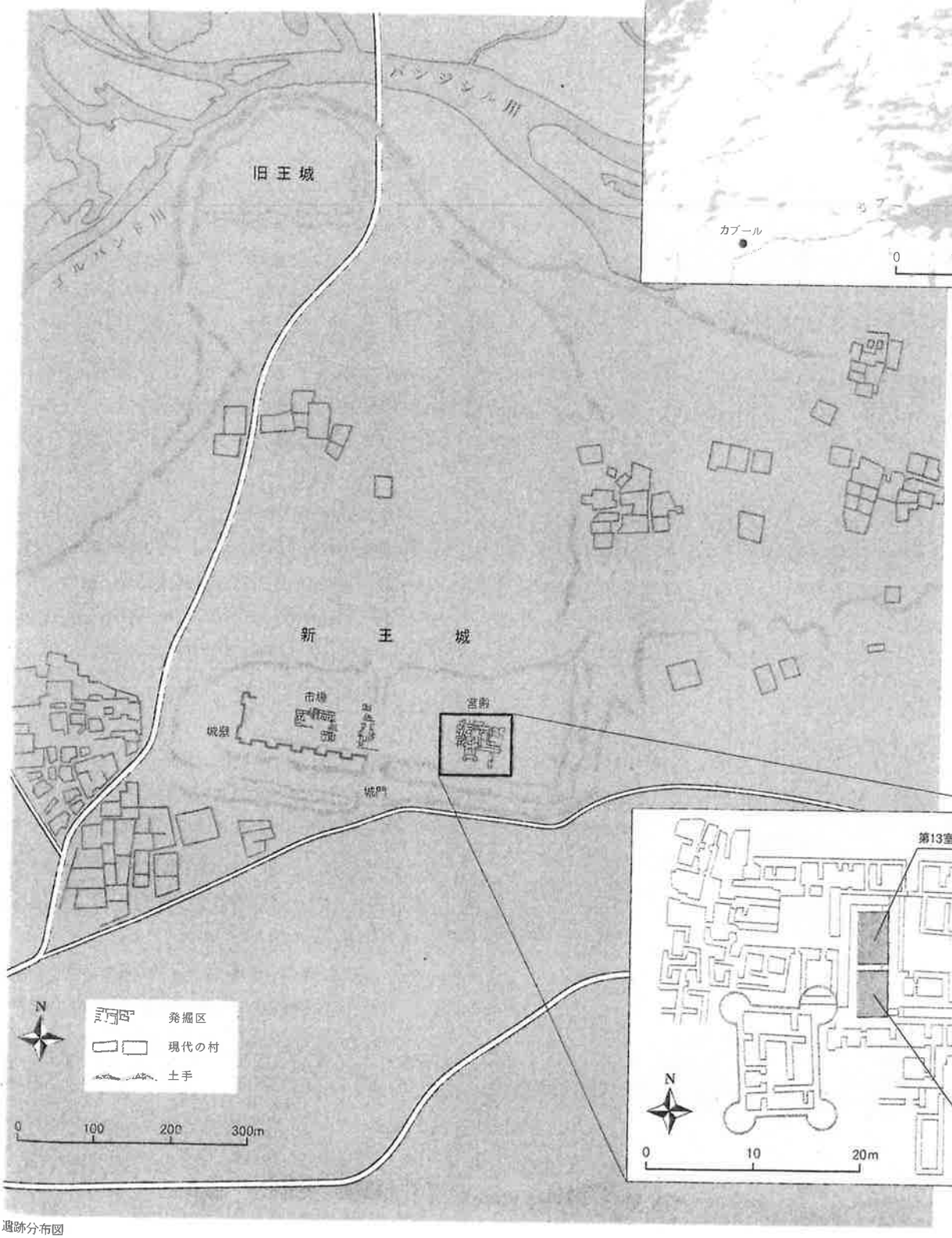
ローマン・グラスの交易ルート



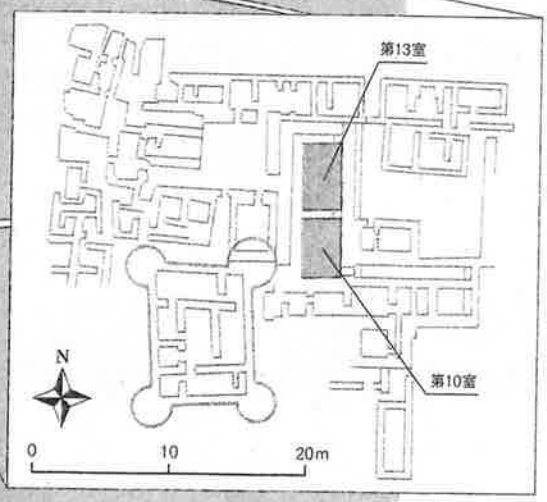
由水常雄・棚橋淳二，1977『東洋のガラス－中国・朝鮮・日本』三彩社



広域図



遺跡分布図



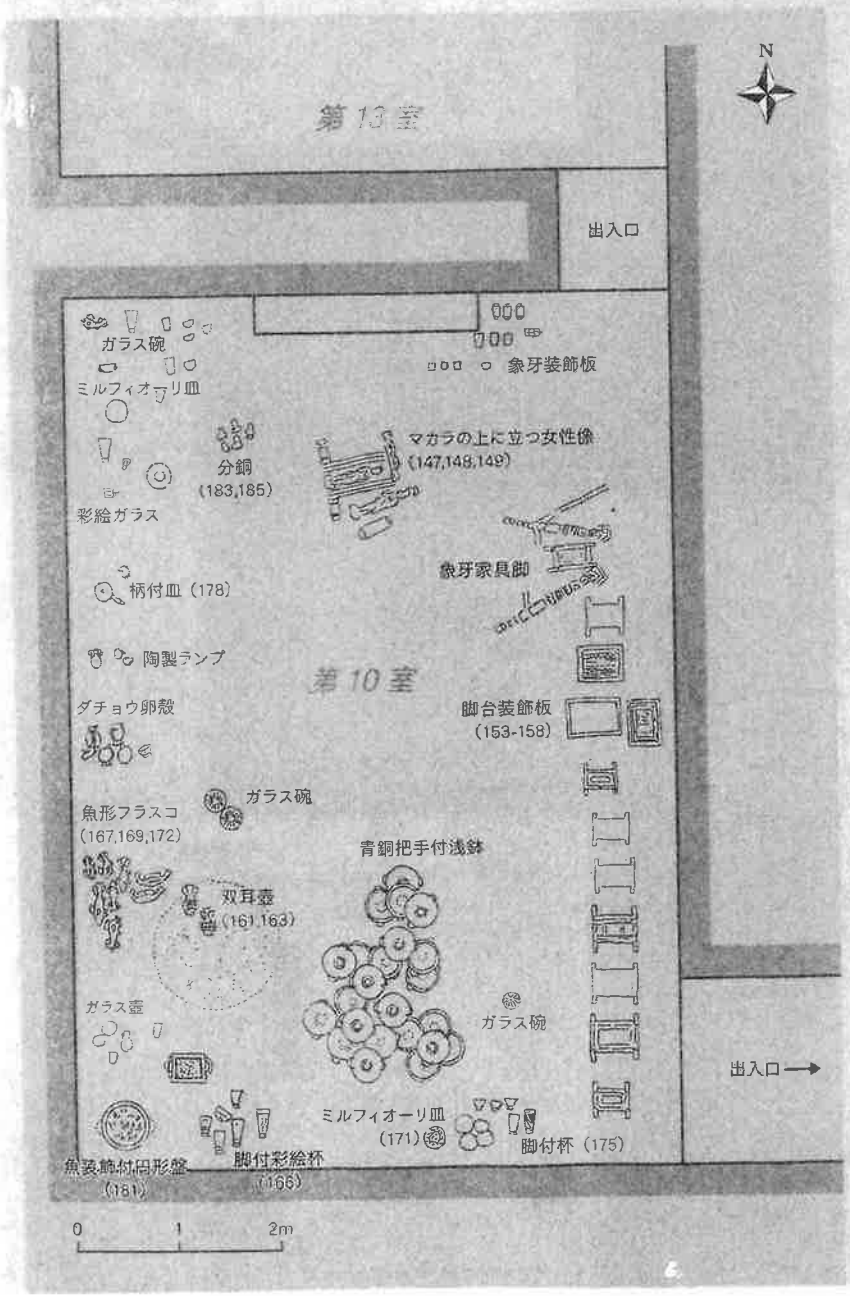
宮殿地区拡大図

九州国立博物館・東京国立博物館・産経新聞社，2016『黄金のアフガニスタン』

BEGRAM

Room 10

ベグラム　第10室



第10室は新王城と名付けられた地区の東側の王宮地区にあり、1937年にJ・アッカンの妻であるリア・アッカンが発掘を行なった。部屋は、南北8.3m、東西5.8mの長方形で、出入口は東面の南端と北面の東端の2ヵ所にある。いずれの出入口も発掘の際には、日干しレンガでふさがれていた。部屋の北壁中央部には低い棚が設けられていた。

部屋の東壁沿いを中心に象牙装飾付の脚台群(No.153他)が並び、東北隅近くに象牙製家具脚(No.152)が、北壁近くに象牙製女性立像(No.147他)が置かれていた。南壁近くには、多数の青銅製鉢(No.182)がまとまって置かれ、南西隅には魚装飾付円形盤(No.181)が、北壁付近には分銅(No.183他)が集められていた。

南壁南東隅付近には、ガラス製切子脚付杯(No.175)やミルフィオーリ皿が、また南壁沿いの南西寄りには、彩絵ガラス杯(No.166)が置かれていた。西壁南西隅付近にはガラス製壺(No.163他)が、西壁に沿った南側には魚形フラスコの一群(No.167他)が、西壁北側隅付近には彩絵ガラス、ミルフィオーリ皿やガラス製脚付杯(No.162他)などが集められていた。

このように象牙、青銅、ガラス、石などで作られたさまざまな遺物は、材質や種類ごとにきちんとまとめて床に置かれていた。当初の配置のまま発見されたとみてよいだろう。　(臺信)

脚付彩絵杯
1世紀
ガラス
高 12.6 cm、径 8.0 cm

Painted goblet
1st century A.D.
Glass
H. 12.6 cm; Diam. 8.0 cm

04.1.43

〈166の各面〉

163 双耳壺
1世紀
ガラス
高 22.7 cm、径 8.0 cm

Vase with two handles
1st century A.D.
Glass
H. 22.7 cm; Diam. 8.0 cm

04.1.41

164 把手付杯
1世紀
ガラス
高 11.0 cm、径 9.2 cm

Cup with a handle
1st century A.D.
Glass
H. 11.0 cm; Diam. 9.2 cm

04.1.42

165 把手付杯
1世紀
ガラス
高 8.9 cm

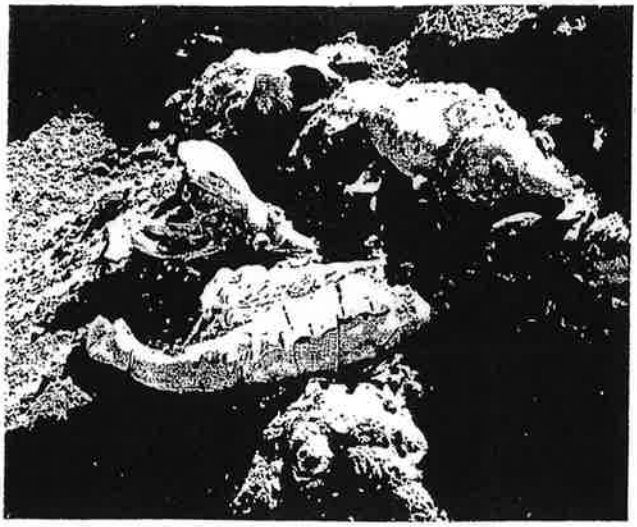
Cup with a handle
1st century A.D.
Glass
H. 8.9 cm

04.1.44

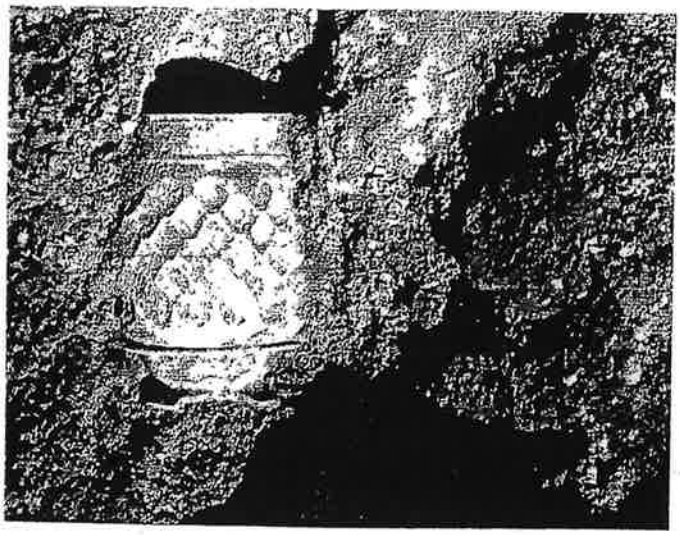
168 脚付杯
1世紀
ガラス
高 9.0 cm、径 6.5 cm

Goblet
1st century A.D.
Glass
H. 9.0 cm; Diam. 6.5 cm

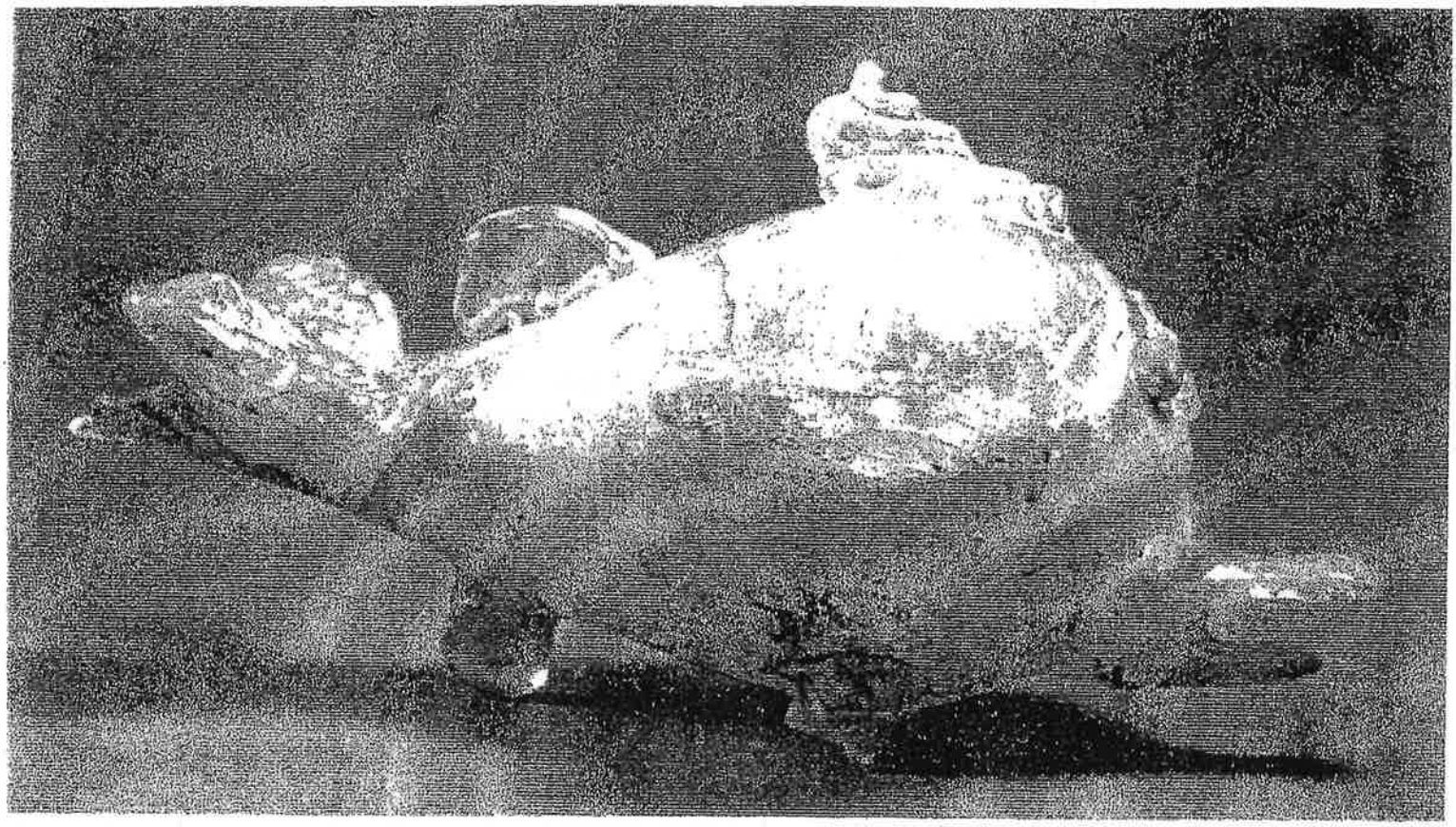
04.1.46



魚形ガラス壺などの出土



切子の杯の出土状況



ドルフィン　1～2c　アフガニスタン　ベグラム 出土

鴨形水注　十六国　中国 辺宁省 北票県 西官営子 馮素弗墓 出土

280
290
300
310
320
330
340
350
360
370
380
390
400
410
420
430
440

西晋

東晋

十六国

北魏

慕容廆（284－333）

慕容皝（333－337）

①慕容皝（337－348）

②慕容儁（348－360）

③慕容暐（360－370）

前燕

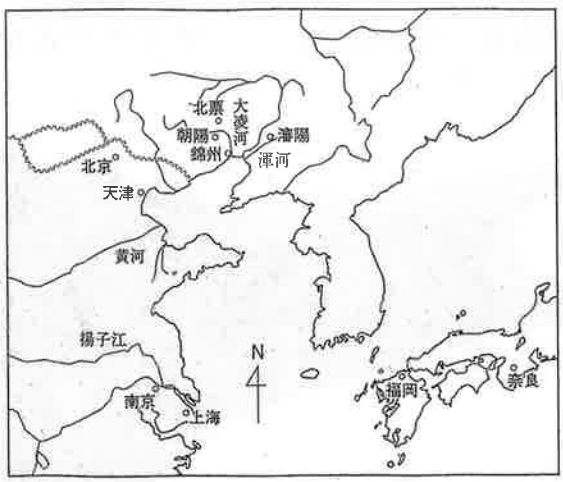
①慕容垂（384－396）
②慕容宝（396－398）
③慕容盛（398－400）
④慕容熙（401－407）
⑤高雲（慕容雲）（407－409）

後燕

①馮跋（409－430）

②馮弘（430－436）

北燕



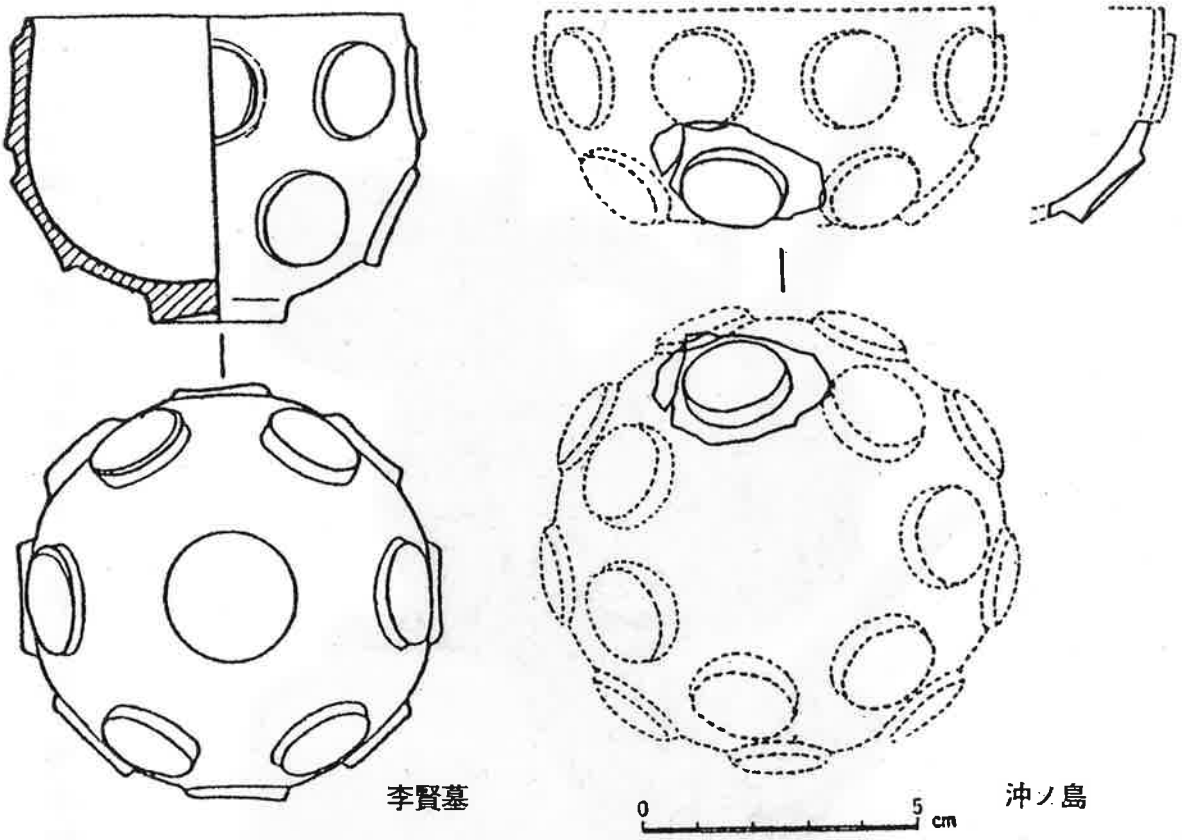
三燕（前燕、後燕、北燕）の系譜と年表

奈良文化財研究所，2004『三燕文物精粋』遼寧省文物考古研究所編

『北方騎馬民族のかがやき―三燕文化の考古新発見』飛鳥資料館図録 第五一冊、二〇〇九

馮素弗墓出土品（下の金印は展示品ではない）

馮素弗墓 木芯金銅張輪鐙



范世民·周宝中、一九八二「网纹玻璃杯考略」『文物』一九八二年第八期

叙利亚、伊朗出土古代玻璃器与河北景县出土网纹玻璃杯的比较

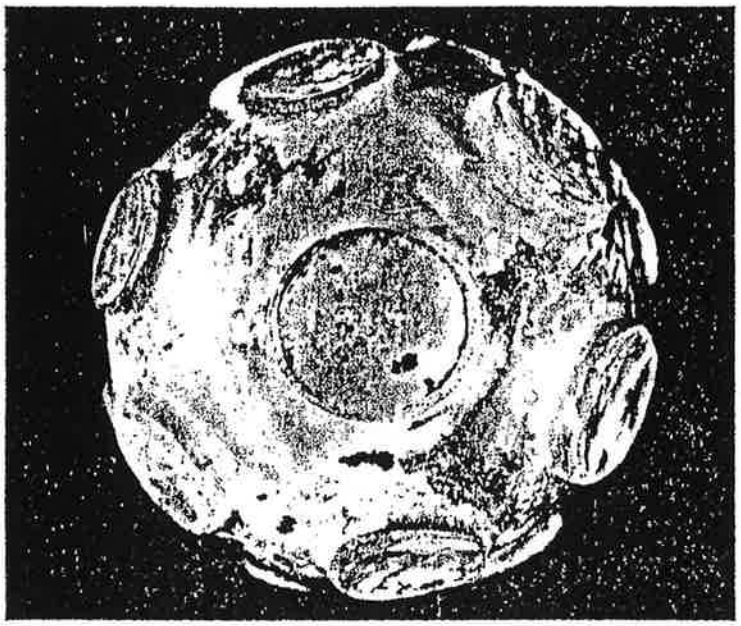
1.叙利亚出土（4—5世纪）

2、3.伊朗出土（5—7、8—9世纪）

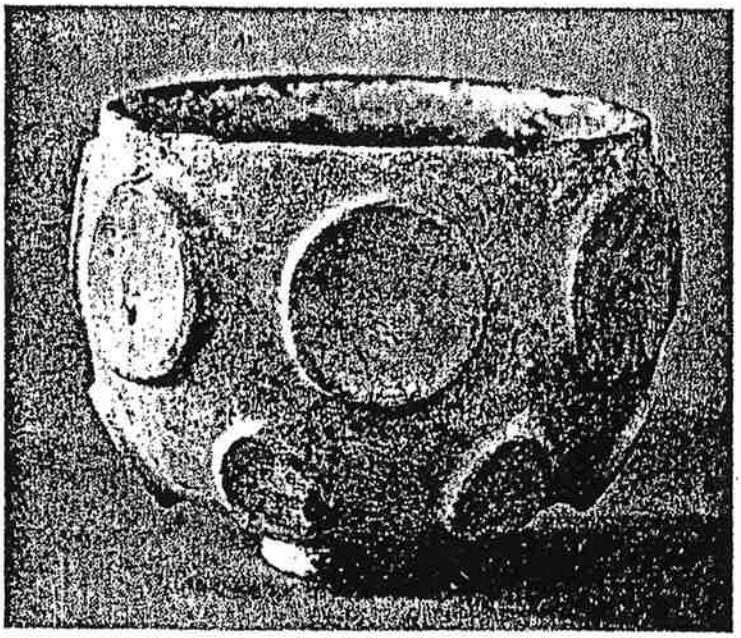
4.景县出土（约5世纪）

安家瑶、一九八六「北周李贤墓出土的玻璃碗—萨珊玻璃器的发现与研究」『考古』一九八六年第二期

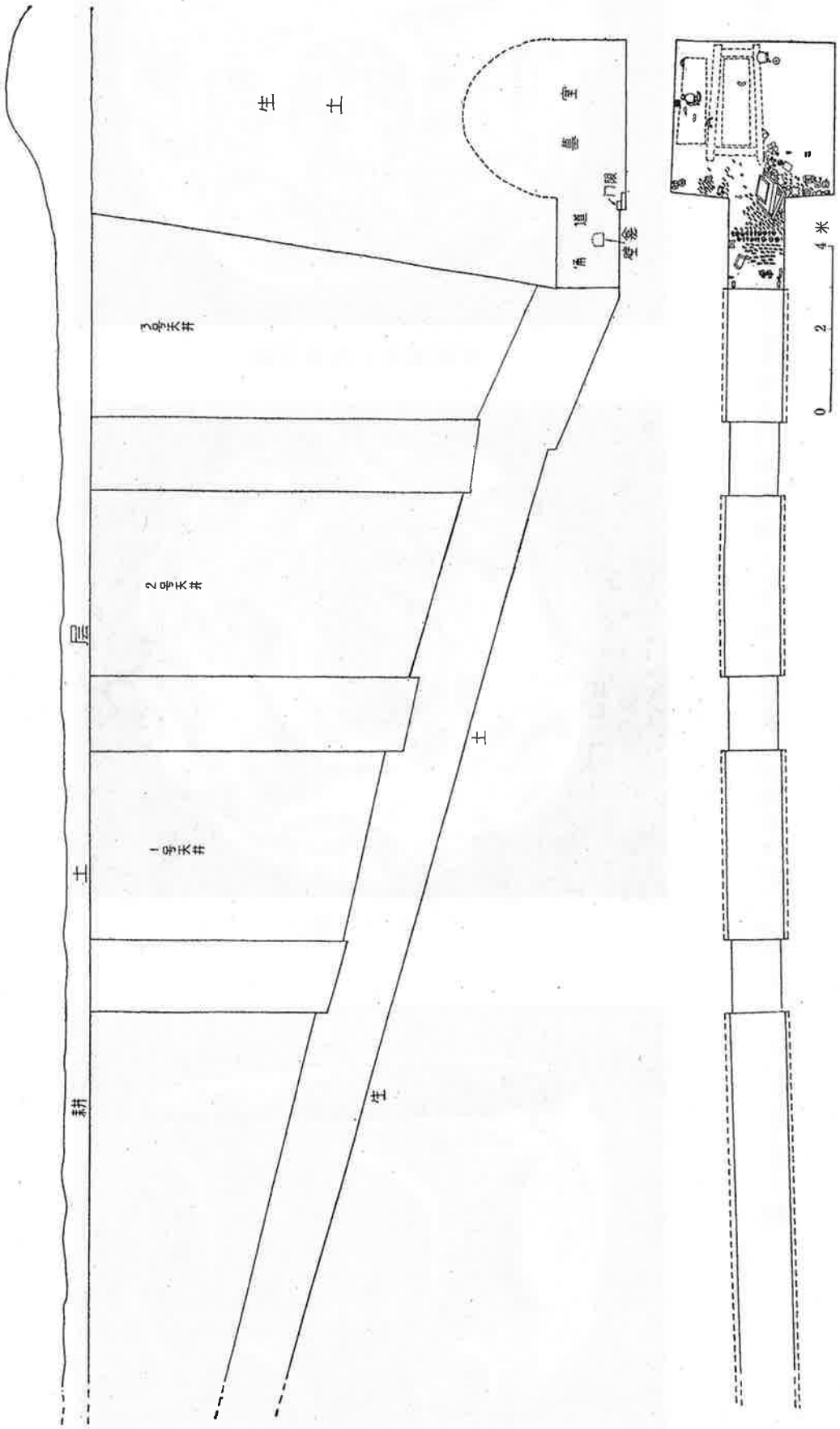
李贤墓出土的玻璃碗



同 （底部）

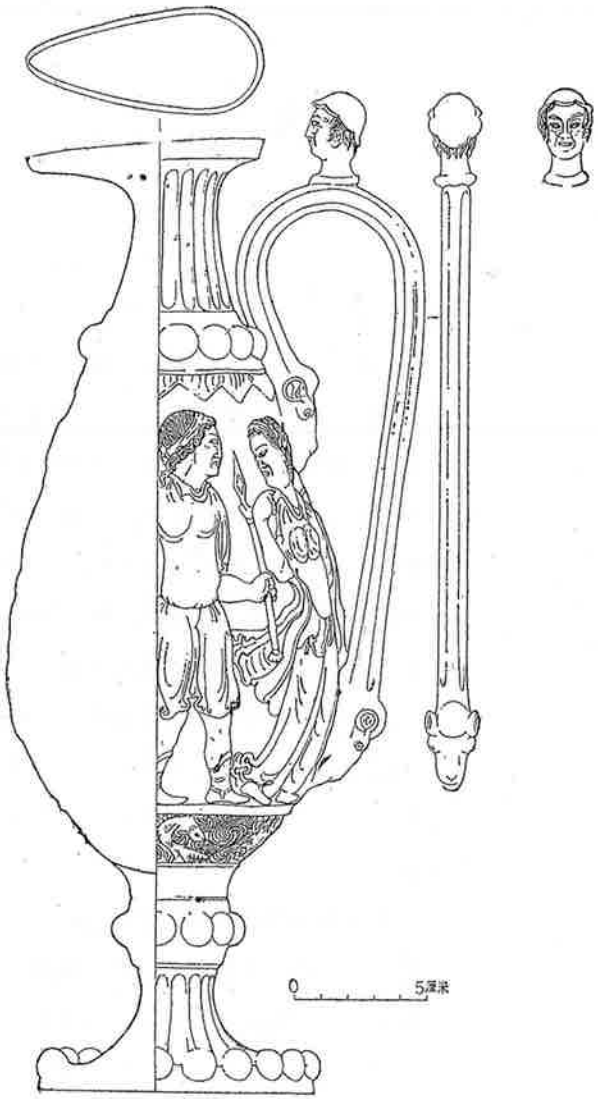


伊朗吉兰州出土的玻璃碗



李贤墓平、剖面图

守夏回族自治区博物館·守夏固原博物館，1985「守夏固原北周李賢夫婦墓発掘簡報」『文物』1985年第11期



鎏金银壶

鎏金银壶腹部图案展开图

九州とシルクロードー沖ノ島と李賢墓ー

玄界灘のまっただ中に浮かぶ沖ノ島が、海の正倉院とも呼ばれるようになったのは、1954年の第1次から1971年の第3次まで、十数回にわたって実施された発掘調査の結果、そこが海神を信仰する島として、長期にわたる祭祀遺物が大量に包蔵され、また、その内容が超一級品であることがわかってからのことである。そしてそのことは、4世紀後半から9世紀初頭にわたり、対外交渉時に航海の安全を祈る、国家的祭祀の場としての性格をじゅうぶんに物語ってくれるものである。

そのうち、5〜6世紀ごろのものとして注目されるものに、カットガラスの碗がある。それは第1次・第2次調査の際、8号遺跡の中央小岩の東北と西南側より同一個体の破片が二つ出土したもので、淡い緑色を帯びている。復元すると、口径約12cmで、上段に9個と下段に7個の円形浮出し切子の装飾をもつものである。その時期のほかの出土品に、朝鮮半島における三国時代新羅の王陵クラスの古墳から出土する金製指輪・金銅製杏葉・鉄鋌・鋳造鉄斧などと共通するものが含まれている。また、朝鮮半島では新羅でのみかなりの数量のガラス容器が出土することを合わせ考えると、沖ノ島出土のガラス碗は新羅からもたらされた公算が強い。このガラス碗については、酷似するものが、はるかイランのギラーン州マザンデラン地方の墳墓で出土していることを、東京大学イラン・イラク調査団の深井晋司氏によって明らかにされた。深井氏によると、イラン高原では、パルティアよりササン・ペルシャの時代つまり3、4世紀以降7世紀ごろにかけて、各種のカットガラスが製作されたものと推定されており、その中に、沖ノ島出土品のような浮出し円文をもつものが含まれているのである。

ところが、古代ガラス研究家の由水常雄氏によれば、イラン高原は、出土地が多いからといってただちに製作地でもあったとすることはできず、むしろ古代貿易ルートの集荷地であった可能性が大きいとされる。そして、そのようなカットガラスは、地中海周辺のローマン・グラスの産地で製作されたものとされる。

日本の古墳時代の出土品には、そのほかに京都市上賀茂神社境内や伝安閑天皇陵古墳でそれぞれ出土したカットガラスがあり、沖ノ島出土品と同じコンテクストで考えられる。

さて、沖ノ島出土の浮出し円文をもったカットガラスにきわめて酷似したものが、シルクロードに当たる地域でも見つかっているのである。それは、敦煌の東南方およそ870kmほどのところに位置する、寧夏回族自治区固原県の県城南部の郷深村で1983年に出土したものである。このガラス碗は、沖ノ島出土品と同様に、浮出し円文の装飾をもつもので、口径9.5cm、高さ8cmの緑色を帯びたカットガラスである。ちなみに墳墓からの出土品300点余りの中には、鎏金銀製把手付の水瓶があり、ササン時代のバクトリア製品とされる。ところで、この墳墓は、墓誌によると、北周の李賢（503〜569年）とその妻呉輝（547年没）の合葬墓であることがわかった。

また、上賀茂神社境内などで出土しているカットガラスは、最近でも1980年に新疆ウイグル自治区の楼蘭古城跡で出土しており、筆者は、1988年の現地調査の際に実見したところである。

このように見てくると、沖ノ島出土のガラス碗のルーツを考えるとき、シルクロードが大きく浮び上がってくるのである。

引用文献

岡崎敬、1979「沖ノ島8号祭祀遺跡出土の玻璃碗」『宗像　沖ノ島』宗像大社復興期成会。

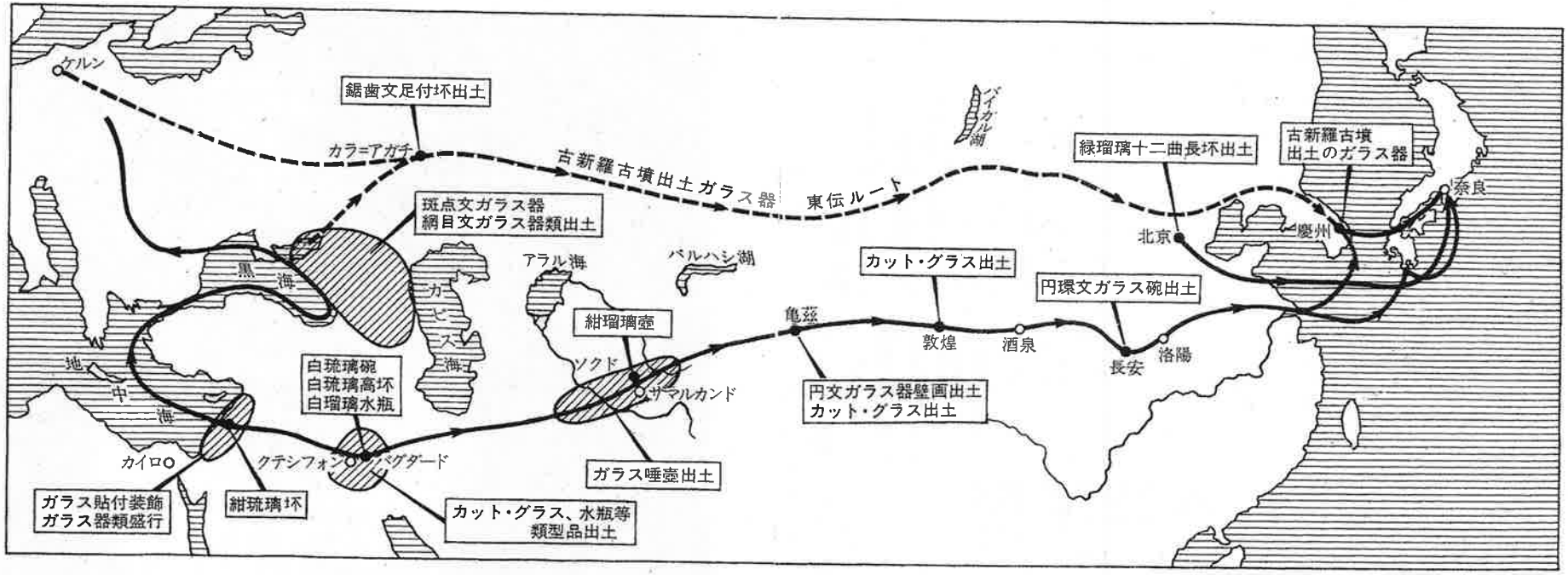
深井晋司、1968『ペルシャ古美術研究ーガラス器・金属器』吉川弘文館。

由水常雄・棚橋淳二、1977『東洋のガラスー中国・朝鮮・日本』三彩社。

B・I・マルシャーク・穴沢咏光、1989「北周李賢夫妻墓とその銀製水瓶について」『古代文化』第41巻第4号。

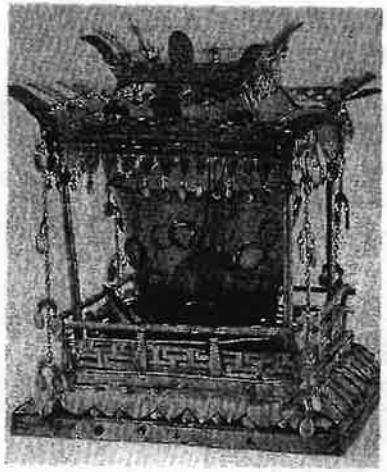
西谷　正、1995『シルクロードによって結ばれた、中国新疆地区と我が国九州地区との比較考古学的研究』九州大学文学部考古学研究室

正倉院ガラス器のルート



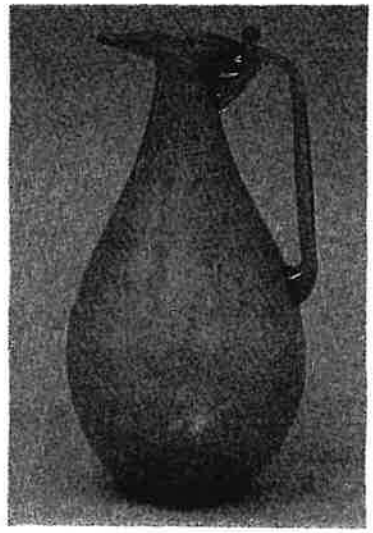
由水常雄，1996『ガラスと文化～その東西交流～』NHK人間大学 テキスト

白琉璃鉢　ペルシア　七世紀　中国西安市何家村出土



緑琉璃舎利坏　ペルシア　韓国慶州漆谷郡松林寺磚塔出土　七世紀　韓国国立博物館

紺琉璃坏　ペルシア　七世紀　正倉院



白瑠璃水瓶　イスラム　九世紀　正倉院

新羅と宋・元の美

韓国古代文化展から

◇4◇

ガラス製鳳首形瓶

遠大なロマン

ガラス容器は、三国時代の古墳のなかでも、新羅の古都・慶州付近の王陵クラスの古墳からしか出土しない。これまでに金冠塚や天馬塚など七基の古墳から二一点のガラス容器が出土している。

そのうちとくに、皇南大塚南墳出土の本例は、その形態などがひときわ異彩を放ち、アジアでは他に類例がない。新羅土器の土のぬくもりとは違って、ガラス容器特有の冷たささえ感じるが、同時に華美にして流麗でもある。

この瓶の形は、鳳凰（ほうおう）のクチバシのような形をした口に、細い頸部（けいぶ）から、やや下膨らみの胴部へと続き、底部には脚台がつく。そして、そのプロポーションは流れるような曲線美を見せる。

口縁下にめぐる一条と、頸部に輪をはめるようにつけた細い十条ほどの帯状装飾や、口から肩にかかる取手は、それぞれ青色を呈して、体部の淡緑色に映えて美しい。加えて取手の上部は、破損後に金糸を巻きつけて修理するなど心にくい。

ガラスの専門家・由水常雄氏によると、新羅古墳出土のガラス容器は、概して地中海周辺のローマン・グラスの産地で、四―五世紀のころ製作された。

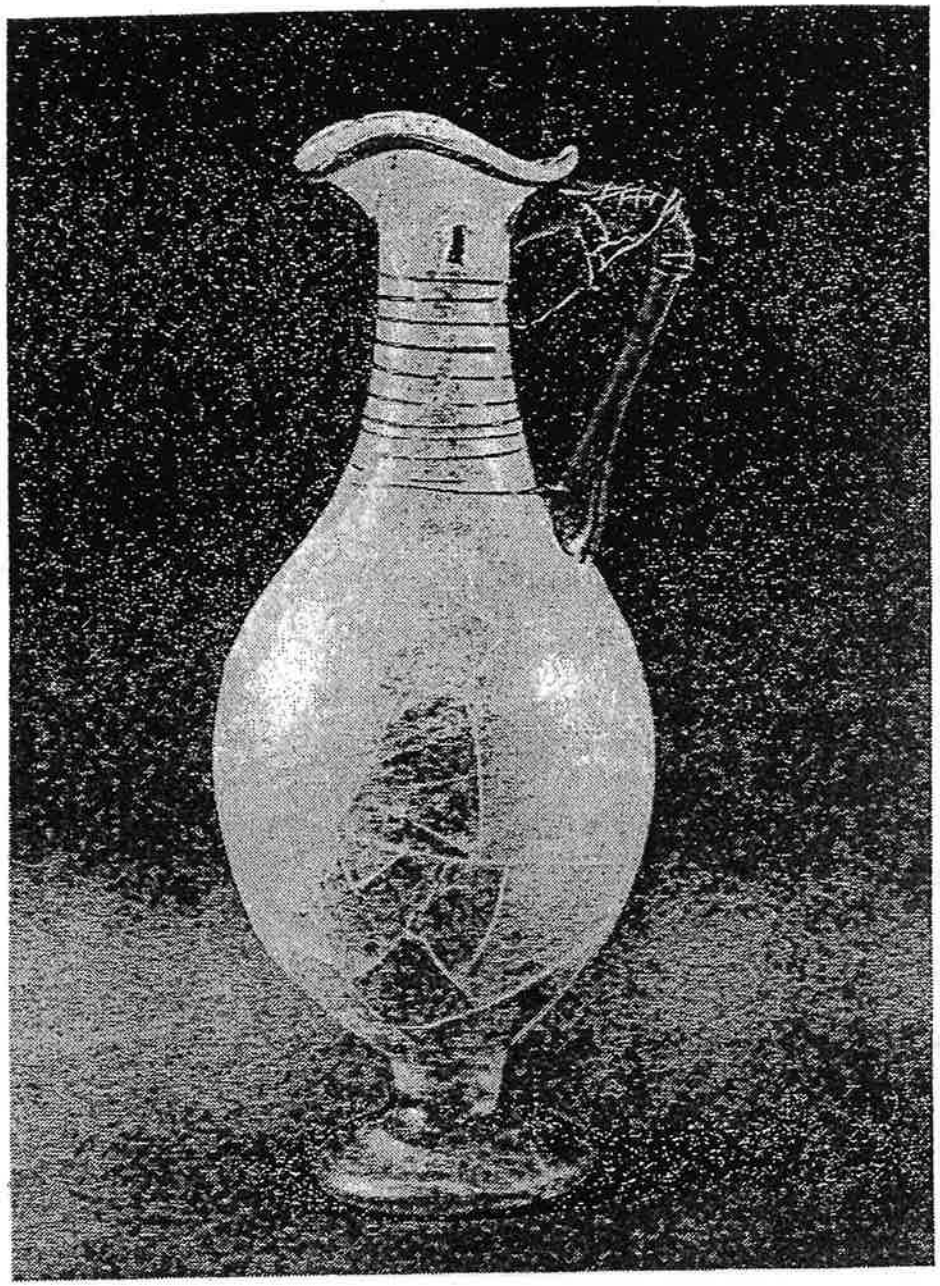
それらの類品の分布をみれば、ステップ・ルートを経由して、はるか新羅にまでもたらされたといわれる。おそらく中国の北朝や高句麗が介在したものであろう。

さらに、本例の形態は、わが正倉院宝物のなかの、胡瓶と呼ばれたガラス器や漆器に通じて、ガラス容器の背後に秘められた遠大なロマンに夢が膨らむのである。

九州大助教授（考古学）　西谷　正

11月2日―12月4日、福岡市美術館。入場料＝一般九百円（前売り七百円）高大生六百円（四百円）小中生三百円（二百円）。月曜休館。韓国国立中央博物館、福岡市美術館、NHK、西日本新聞社主催。

1983年10月20日付『西日本新聞』夕刊



대성동 91호분 출토

加耶・大成洞 91号墳

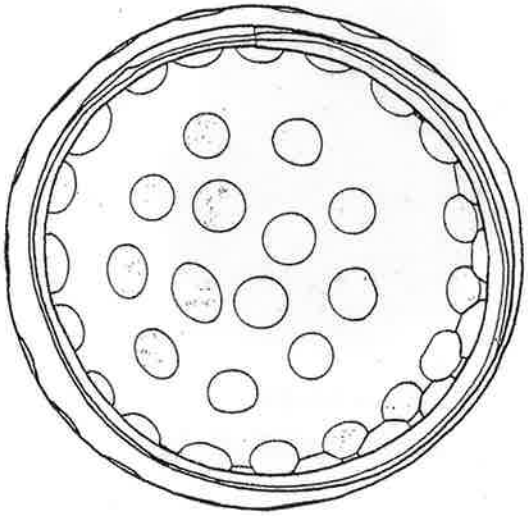
경주 금관총 출토 (국립경주박물관)

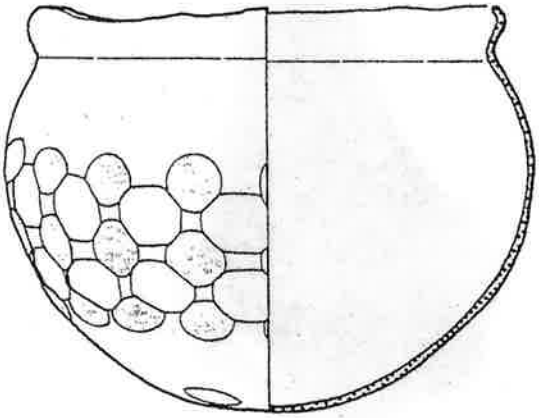
新羅・金冠塚

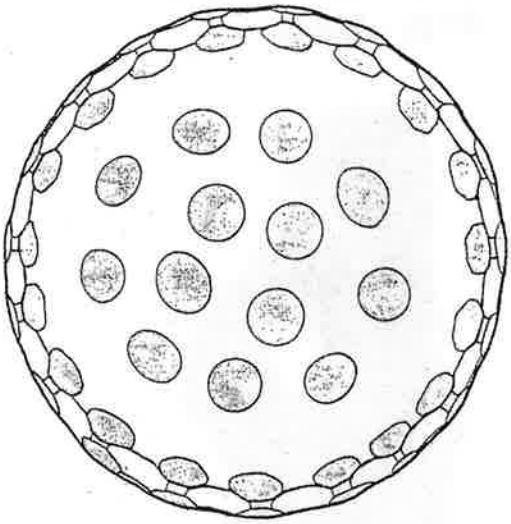
경주 사천왕사 출토 (국립경주문화재연구소)

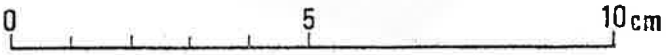
統一新羅・四天王寺跡

大成洞古墳博物館, 2017『秘密の門をもう一度叩こう』

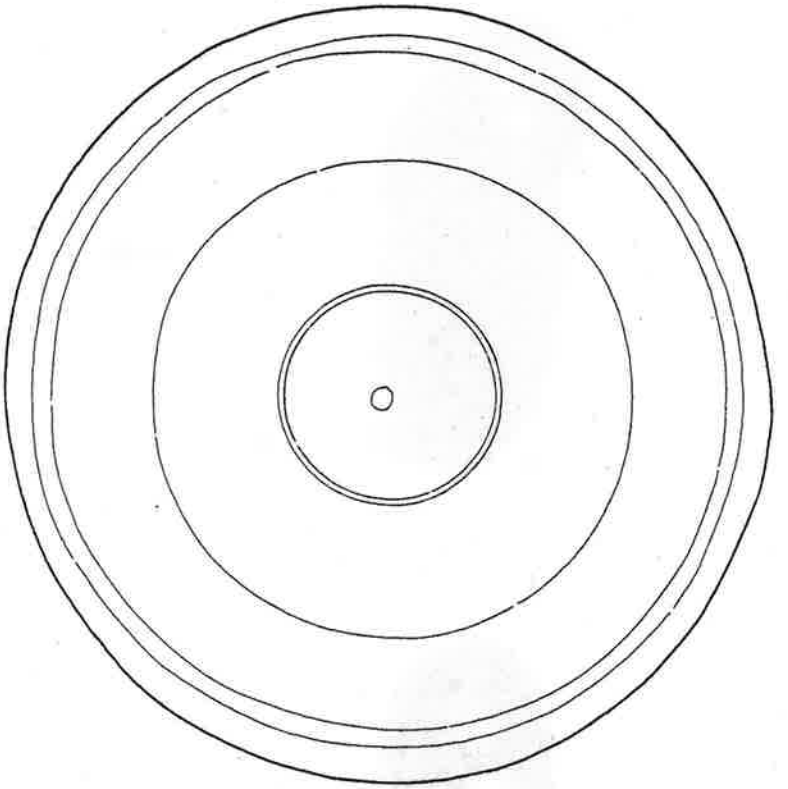


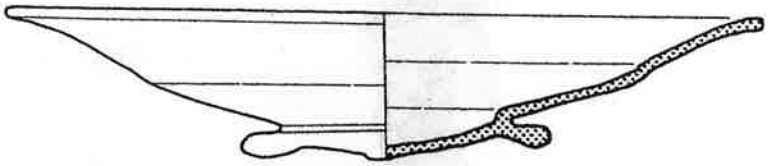




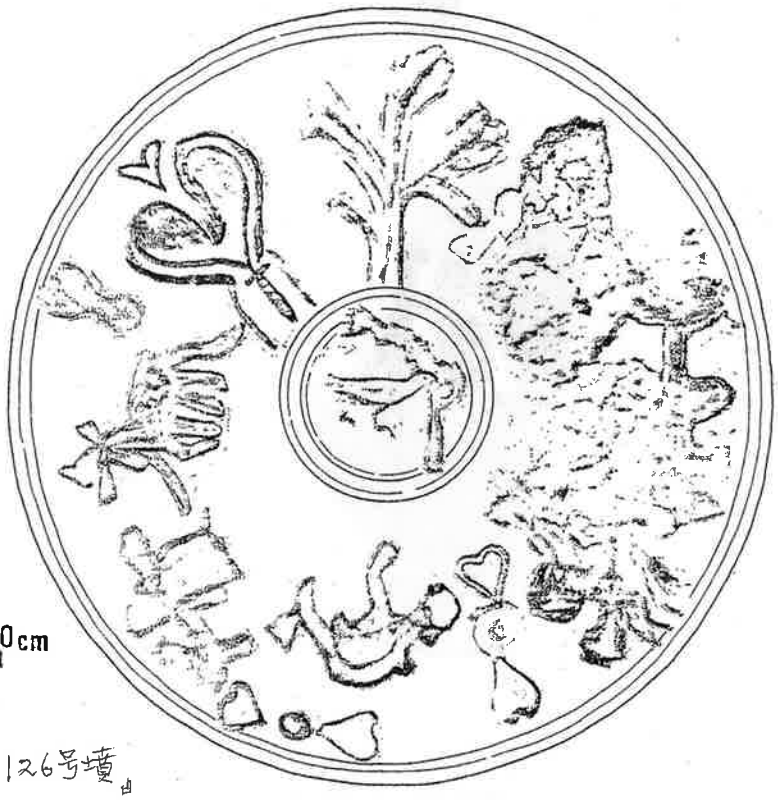


ガラス製碗―上・上から　中・側面から　下・底部から





ガラス製皿実測図（実大）



ガラス製皿の文様の痕跡

橿原考古学研究所，1977『新沢千塚 126号墳』